HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウィリアムズにおける全一性と道徳的行為者性
Author(s)	都築, 貴博
Citation	哲学, 44, 101-118
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35054
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_RP101-118.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学哲学会『哲学』44号（2008年２月）

ウィリアムズにおける全一性と道徳的行為者性

都築貴博

生前、バーナード・ウィリアムズは功利主義やカント倫理学への容赦ない攻撃を展開した。特に知られているのは、功利主義が人格的な「全一性 integrity」と相容れないという指摘であろう。これは「全一性に基づく反論 integrity objection」と呼ばれ、多くの論者の批判を招いた。しかし、大抵の批判はウィリアムズの議論を誤解しているか、少なくともその要点を捉え損なっていると思われる。この点を示すため、本稿ではウィリアムズの後年の諸論考を参照しつつ、「全一性に基づく反論」について考察する。

1　二つの事例

ウィリアムズは、今では広く知られるものとなった二つの事例を提示する。第一の事例では、化学者であるジョージが化学兵器・生物兵器の研究所に就職するよう提案される。受けいれるならばジョージと家族は生活苦から解放されるが、拒むならば他の者が代わりに就職し、熱心に研究を進める見込みが高い。第二の事例では、インディオの処刑場面に遭遇したジムが一人を殺すよう指揮官から提案される。提案を受けいれるならば十九人が解放されるが、拒むならば二十人全員が殺される（Williams 1973a, 97-99）。

二つの事例には次の構造が見られる。すなわち、自分がある行為をなさないと他者が代わりに行為し、その結果生じる事態は自分が行為する場合よりも悪い。この厄介な状況に対して功利主義は単純明快な解決を示す。価値の担い手は結果としての事態であり、何をなすべきかは事態に照らして決まる。自分と事態の間に他の行為者が介在するか否かは、なすべき行為を決めるうえで特別な違いを生まない。それゆえ、状況が上のように記述される限り、ジョージは就職すべきであり、ジムは一人を殺すべきである。

ここにウィリアムズは問題を看て取る。このような思考は、「私たちはそれぞれ他者がなすことではなく〈自分〉のなすことに特別の責任を負っているという観念」を切り捨て、それと緊密に結びついた全一性の価値を切り捨てている（Williams 1973a, 99）。以下三節で、この指摘の意味を詳しく考えてみる。

2　全一性の顕現

ウィリアムズによると、全一性は一種の「称賛に値する人間的特性」である。ただし、全一性を徳の一種と看做すのは適切でない。全一性と徳の間には動機づけに関して重要な違いがある。例えば寛大さや仁愛はそれ自体で特有の動機づけを生むが、全一性はそうでない。勇気や自制は特有の動機づけを生まないが、望ましい仕方で望ましい動機から行為するために必要である。全一性はそれとも異なる。ウィリアムズによると、全一性を顕わにする人物とは、最も深い仕方で〈自分〉のものとなった性向と動機から行為する人物である。そのような人物は全一性から行為するのではない。むしろ、〈自分〉の計画を遂行することにおいて、全一性を顕わにする（Williams 1981, 49）[1]。

そうであるならば、功利主義的な意思決定は全一性の顕現と相容れない。功利主義的な意思決定の主体は、特定の時点と場所に置かれた「満足の体系の代理人」（Williams 1973a, 115, Cf. Williams 1981b, 4）である。彼は自分が

影響を与えうる人びとの計画を等しく考慮し、自らを「各人の計画の入力」と「最善の決定の出力」の間の経路とする。「それは、〈彼の〉行為および〈彼の〉意思決定が、彼が最も密接に同一化している計画や態度に発する行為および意思決定と看做されねばならない範囲を無視している。それは最も字義通りの意味で、彼の全一性に対する攻撃である」(Williams 1973a, 116f.)。

3　性向の深さと厚み

問題は意思決定と行為のレベルにとどまらない。功利主義的思考は性向への深い同一化それ自体を阻害するからである。[2] 事柄の焦点は同一化の〈深さ〉にある。

特定の個人として、ひとはそれぞれ「主観的動機群 subjective motivational set」をもつ。そこに含まれる諸要素のうち、幾つかは「人柄 character」との結びつきの薄いものであろう。[3] 単純な線引きはできないにせよ、例えば「身体的苦痛を避けようとする単なる欲求は人柄を構成するに適切でない」(Williams 1981b, 8) と言うのはもっともらしい。他方、主観的動機群には「評価の性向、情動的反応のパターン、個人的忠誠」が含まれ、行為者の「コミットメント」を具現化する諸計画も含まれる (Williams 1981g, 105)。それらは行為者が深く同一化するものであり、そのようなものとして、人柄の構成に寄与し、「人生の意味」と「生きる理由」とを当人に与える。「ひとは、自分の人生の大半、あるいはその一部分ですら、自分の存在に密接に関わり、自分の人生の意味を重要な程度で与える〈基本 ground〉計画ないし計画群をもつ」(Williams 1981b, 12)。[4]

もちろん、主観的動機群の諸要素が変化しないということではない。例えば、私は「熟慮 deliberation」を通じて自分の欲するものが何を含むかを理解し、欲求を喪失しうる。あるいは、想像力の発揮を通じて新たな欲求を獲得し

うる（Williams 1981g, 104f.; 1995c, 38）。他者の影響も当然にある。他者の否認を避け、自分の尊敬する人物に尊敬されることを欲するならば（Williams 1995c, 41f.）、他者との関わりのなかで私の基本計画と人柄は変化しうる。

しかし、この事実によって基本計画の意義が消失するわけでもない。私は変わりゆく基本計画によってそのつど人生の意味を獲得する。私は現在の基本計画をもって過去の出来事を再解釈し、予期される未来を意義付け直す[5]。私は自らの性向や人柄をすべて脱した見地から人生を眺め、行為を決定するのではない[6]。「自己の人生に関する正しいパースペクティブは、〈現在から〉なのである（Williams 1981b, 13）。

行為者が深く同一化する性向には道徳的種類のものも含まれうる[7]。したがって、道徳的性向もいま見た意味で「深さ depth」と「厚み thickness」を有する。それは行為や事態を引き起こすための「単なる装置」ではない（Williams 1995e, 169）。それは人柄や人生の意味と結びつき、当人の「状況の眺め方」を構成する（See, Williams 1988, 190）。

そうであるならば、道徳的種類のものを含めて、深い性向は功利主義的思考と相容れない。例えば、ジョージやジムの道徳感情は彼らにとっては意識の表層に現れ出た単なる情動ではない。それは自分が正、不正と看做すものの表示であり、そのようなものとして、「世界に対する道徳的関係」を部分的に形成する。その種の感情をもっぱら功利主義的な見地から、言わば道徳的自我の外部で起こる「偶発事」と看做すことは、「道徳的アイデンティティ」の感覚を喪失することであり、全一性を喪失することである（Williams 1973a, 103f.）。深い道徳的性向を身につけるならば、自らの思考や行為において功利主義的要請を確実に反映する人物になることはできないのである（Williams 1981d, 51）[8]。

4　人柄と責任

行為者の熟慮についてもう少し見ておく。行為者は特定の人柄をもつ存在者として熟慮するのであり、熟慮のあり様は人柄と密接に連関する。例えば熟慮の結論のうちに周囲の者は行為者の人柄を見出しうるし、結論は行為者にとっても自己発見でありうる。それは誇張や比喩ではない。そもそも行為者は自分の基本計画や人柄を明確に理解しているとは限らない。新たな状況に遭遇するなかで行為者は今まで気づかなかった自分の基本計画や人柄を看て取る。熟慮は潜在的であったものを顕在化し、例えば「私にはϕすることはできない」と結論するなかで、自分はまさしくこのような人間であったのだと気づかされるのである（Williams 1981i, 130, Williams 1995d, 52. See also, Williams 1985, 187-191, Williams 1993, 72ff., Williams 1995b, 5, 17ff., 村上 2007, 24）。

このようにして人柄は、熟慮と後続する行為において姿を現す。責任の観念もまたその延長線上にある。何かに責任を認めるということがあるならば、ひとは自分の人柄の発現である意思決定や行為にこそ責任を認めねばならない。行為における人柄の発現は、行為が〈自分〉の行為となる最も実質的な仕方なのである（Williams 1981i, 130f.）。

こうした責任の観念は、功利主義的な思考と相容れない。功利主義の見地では価値の担い手は結果としての事態であり、行為者は自分のたまたま置かれた位置から最善の事態の発生に向けて寄与するよう求められる。諸々の可能性の検討は事態そのものの比較考量であり、事態と自分の間に他の行為者が介在するかどうかは重要でない。最終的に誰が事態を生じさせるにせよ、自分は最善の事態が発生するように、また、それに劣る事態が発生しないように手を打つべきなのである。それゆえに功利主義は「消極的責任 negative responsibility」のテーゼを伴う。すなわち、「私が何かに責任を負うとするならば、私は、より日常的、限定的な意味で私が生じさせたことに責任を負うのとまったく同様に、私が許した、あるいは防ぎ損なったことについても責任を負う」（Williams 1973a, 95；Cf. Williams 1972,

96, Williams 1981b, 4)。

この見地が見落としているのは、行為者は「因果的な梃子」(Williams 1973a, 115, Williams 1981b, 4) を動かすだけの存在ではないということ、特定の人柄をもって世界を眺め、人柄の発現である行為に特別の責任を認める存在であるということである。まさしく功利主義は「人間の欲求と行為についてほとんど皮相的な理解しかなしえないという非常に基本的な理由のために」(Williams 1973a, 82)、全一性を理解しえず、全一性を理解しえないために、〈自分〉の行為に特別の責任があるという観念を切り捨てるのである。

以上の考察を整理しておく。「全一性に基づく反論」は次の基本的主張からなっている。

1 功利主義は全一性の顕現と相容れない。
2 功利主義は性向や計画への深い同一化と相容れない。
3 功利主義は人柄と結びついた責任の観念と相容れない。

これを踏まえて、ウィリアムズに対する典型的批判に目を転ずる。

5 幾つかのウィリアムズ批判

5—1

「全一性に基づく反論」は偏狭な利己主義や不公平主義に道を開くとしばしば批判される。いわく、ウィリアムズの議論では、大富豪が貧困層への無関心を貫くことや、人種差別主義者が溺れている黒人の子供を見殺しにすることすら正当化される (Gewirth 1988, 285f.)。

この種の批判は議論の趣旨を著しく誤解している。ウィリアムズは明確に述べている。「全一性に基づく反論」には、全一性が「行為の判定基準」であるという含意も「唯一の価値」であるという含意もない[9]。議論は、全一性が「一

つの価値」であるという主張に依拠しているに過ぎない（Williams 1995g, 212f.）[10]。

「全一性に基づく反論」は、「行為は全一性の顕現であるとき、そのときに限り正しい」という見地から功利主義を批判するものではない。そもそもウィリアムズは、正不正を判定するための対案を提示していない。事柄の焦点は特定個人としての「行為者性 agency」にある。性向や計画に深く同一化し、人生に意味を見出すこと。全一性を顕わにし、〈自分〉の行為に特別の責任を認めること。そうした行為者としての実践に価値を認める限り、功利主義を採用することはできない。ジョージとジムの事例も、功利主義者の〈答え〉の誤りを指摘するために置かれるのではない。二つの事例は、功利主義的な〈観点〉が排除するものへの反省を誘うために提示される[11]。「哲学にとって最初の問いは、〈あなたは功利主義に同意するか〉ではなく、〈あなたはその問いに対する功利主義の眺め方を本当に受けいれるか〉である」（Williams 1973a, 78）。

5—2 同様の誤解はハリスにも見られる。ハリスは、ウィリアムズのうちに、全一性の観念によって消極的責任の存在のみを否定する立場を読み込み、これを批判する。いわく、ウィリアムズの主張は消極的責任のみならず積極的責任をも攻撃の対象にする。というのも、「他の誰かが因果的背景を構成したために、ある人が〔彼の計画とは〕別の何かをなすことにいっそう大きな効用があるとき、その人に彼の計画を放棄するよう求めることが馬鹿げているならば、同程度の効用の減少を直接的に含む計画を放棄するよう彼に求めることも馬鹿げている」（Harris 1974, 266）。しかも、ウィリアムズは消極的責任の存在を否定することにすら失敗している。ウィリアムズが示しえているのは危害を防止しないことで正当化される事例があるということであって、消極的責任は存在しないということではない（Harris 1974, 266f.）。

明らかにハリスの批判は失当である。ウィリアムズは正不正や責任の有無を判定する基準として全一性の観点を提

示しているのではない。実際、ウィリアムズの叙述には消極的責任の存在を認めるふしすらある。「ペドロのインディオ殺害がジムの拒否の帰結であるためには、ただ、ジムが拒否しなかったならばペドロはそれをなさなかったであろう、ということが因果的に真であればよい。そのような帰結が生じたとすれば、これは、ある意味で、その帰結に対するジムの責任について私たちが語るために十分であるかもしれない」(Williams 1973a, 108f. 強調は引用者)。

ウィリアムズは、消極的責任について語ることそれ自体を批判するのではない。批判の矛先は功利主義的な〈観点〉に向けられる。行為者は特定の性向、計画、人柄をもつ人物として〈自分〉の行為に「特別の責任」を認める。だが、功利主義的な〈観点〉のもとでは道徳的性質の源泉は結果としての事態であり、この見地から責任の観念は均質化される。〈自分〉の行為に対するジムの責任は、ペドロが引き起こした事柄に対するジムの責任ともっぱら「同じ資格」(Williams 1973a, 95)で理解される。この〈観点〉によって喪失されるものにウィリアムズは注意を促すのである。[12]

5—3 八十年代以降、功利主義の理論的な洗練が進んだ。今日、以下の応答は功利主義者の常套である。洗練された功利主義ならば全一性と相容れる。ウィリアムズは功利主義を矮小化して批判しているに過ぎない。

洗練された功利主義としては、ヘアの「二層理論 two-level theory」や、「正しさの基準」と「意思決定手続き」を峻別するブリンクの戦略が知られる。細部は異なるが、それらの理論には共通の特徴がある。それは、功利主義的な意思決定を日常的に採用することは功利主義的に望ましくないとし、日常の非功利主義的思考を功利主義的見地から擁護するという戦略である(Hare 1981, Brink 1986, 1989. See also, Railton 1984, 都築 2006)。

しかし、この戦略が日常的な行為と意思決定のレベルで成功を収めるとしても、深い同一化からの疎外という問題が残る。功利主義を採用する思考主体は、日常的な意思決定のレベルではどうであれ、功利主義的な反省においては、自らの性向や計画を最善の結果のための「単なる装置」と看做す。その反省それ自体が深い同一化からの疎外をもた

らすのである。疎外など生じないという意見は、反省が特定の人柄をもつ行為者において遂行されるという事実を真剣に扱っていない。「…何をなすべきかについて、ある仕方ではなく別の仕方で思考することは、経験的に別のものとなることであり、ある種の人物になるということである。あらゆる種類の性向とあらゆる種類の反省とを結合することは不可能である」(Williams 1981d, 51f.)。したがって、功利主義が日常の意思決定レベルで非功利主義的思考を要請するにせよ、その指摘だけではウィリアムズの問題提起に十分に応えていない。問題は依然として残る。[13]

5—4 功利主義者の更なる応答を考えてみる。第一に、深い同一化がそれほど重要であるならば、ほとんどの人びとは功利主義的反省に従事しなくてよい、と言われようか。これは徹底すると、功利主義者の階級と非功利主義者の階級を分断する立場、ウィリアムズの言う「総督邸の功利主義 government house utilitarianism」(Williams 1985, 108. See also, Sen and Williams 1982, 16) に帰着する。だが、この戦略も「全一性に基づく反論」を終わらせない。功利主義者の階級に属する者も自らの性向と人柄をもつ行為者である。〈あなたは功利主義の眺め方を本当に受けいれるか〉という問いは、依然として投じられる。第二に、功利主義者の階級すら要請せず、誰も受容してはならない「自己抹消的 self-effacing」な理論として功利主義を理解するという道がある (Cf. Parfit 1984, 40ff.)。だが、これは功利主義者にとって喜ばしい帰結ではないであろうし、そのような理論を公的に主張することの意義も不可解となる (Williams 1988, 192)。第三に、そもそも全一性の観念に意義を認めないという応答がある。スマートは言う。功利主義者は非功利主義的立場に由来する全一性の観念に配慮する義務を負っていない (Smart 1977, 133)。

「全一性に基づく反論」は第三の応答の誤りを〈証明〉するものではない。それに対する〈問い掛け〉であり、〈反省への誘い〉である。人生に意味を見出すことは深い同一化を要求し、性向を通じて世界を眺めることを要求する。あなたは功利主義的な〈観点〉を本当に採用する用意があるのか。採用することができるのか。

次の返答が予想される。自分は功利主義者として生きるという計画に深く同一化している。それゆえ、功利主義的反省と深い同一化や全一性の間に衝突は生じない。もちろん自分は功利主義的な〈観点〉を採用する用意がある。

この返答も依然としてウィリアムズの問題提起の意味を捉え損なっている。計画への深い同一化は、計画の内実がどのようなものであれ、その計画を「単なる装置」と看做すことと相容れない。これは功利主義者として生きるという計画についても言える事柄である。功利主義的な〈観点〉は、行為者が真に採用するならば何であれ深い同一化を阻害するのである。私たちは功利主義的な〈観点〉が排除するものの重さを改めて考えねばならない[14]。

ここまでの考察を踏まえて、ウィリアムズの問題提起の意義をまとめておく。ウィリアムズは正不正や責任の有無を判定するための対案を提示して功利主義を批判するのではない。むしろ、功利主義的な〈観点〉を採用することの本性と帰結とを問う。功利主義的な〈観点〉のもとでは、価値の担い手は事態であり、思考主体は、もっぱら事態を生じさせるための「因果的力能」として自らの行為者性を意義づける（See, Williams 1981b, 4）。特定の性向を通じた深い意義付けは排除され、思考主体は、自らの実践的なアイデンティティも、生きることの意味すらも奪われる。功利主義的な〈観点〉のこうした含意が明らかになるとき、ひとはこれを真に採用できるであろうか。私たちは一個の人間としての深い同一化を放棄し、自らの行為者性に道具的価値しか認めない見地に立ちうるであろうか。功利主義者を自認する者は、洗練された功利主義にとっては「全一性に基づく反論」は無効であるという常套的な観念を反復するのではなく、ウィリアムズの問題提起に正面から向き合わねばならない。彼の問題提起はいまなお意義をもち続けているのである。

6　モラル・ディレンマと後悔

功利主義者は角度を変えて反論するかもしれない。いずれにしても私たちは解決の困難な道徳問題を抱え、その答えを導く思考を必要とする。功利主義は善と正の明快な理論を提示し、この要求に見事に応える。道徳問題の解決を真に求めるとき、私たちは功利主義のもつ確かな説得力を認めるのである。実際、ジムは恐らく一人を殺すしかないとウィリアムズも考えている（Williams 1973a, 117, 1995g, 211）。ジムの事例はかえって功利主義に有利に作用する。

この反論に本格的に答えるには、価値の多元性やモラル・ディレンマに関する別途の考察が必要になる。ここでは要点を述べることにとどめる。

すでに触れたように、私たちは他者の影響をおおきく受けつつ、おのれの主観的動機群を形成する。しかし、動機群は必ずしも整合的体系ではない。私たちは異なる社会的起源をもつ諸価値を相続しており、諸価値は熟慮のなかで深刻に衝突しうる。ここにおいて必要なのは究極の価値を措定し、価値の衝突が最初から存在しないかのように事態を再記述することではない。必要なのは価値の衝突を消去するのではなく、むしろ適切に理解する理論である（Williams 1981f, 72f.）。

道徳的理由も熟慮において相互に衝突しうる。しかし、道徳的見地からみて答えを一つに決定しえないとしても、しばしば行為者は何らかの行為を選ぶよう余儀なくされる。功利主義的解決はそのような状況で採用される緊急条項の一つであり（Williams 1973c, 184）、それに基づき行為者は例えば一人を殺すことを決断する。しかし、それは当初の道徳的理由を改定することと同じではない。第一に、熟慮の〈べし〉と道徳的な〈べし〉は別個である。道徳的な〈べし〉が目下の状況に適用されることを認めつつ、それに反する選択をなすことは可能である。第二に、行為者

は目下の状況ではこの選択をするしかなかったのだと考える一方で、自分の行為に対し「後悔 regret」の念を抱きうる。それは、行為において採用しなかった義務を真性の義務と看做し続けていることの証しである。悲劇的状況では、行為者は道徳的要請に反すると自らが考えるものを止む無くなすのであり、その事実が状況を悲劇たらしめるのである（See, e.g., Williams 1973c, 175ff., Williams 1981f, 74, See also, 田村 1998, 37f.）。

ところが、倫理学理論としての功利主義はこのような衝突を理解せず、したがってまた、後悔が「道徳的残余 moral remainder」であることを理解しない。功利主義は目下の状況に義務の真性の衝突は存在しないと告げ、衝突を根本的に解消する（Williams 1972, 85f. See also, Williams 1972, 83-86）[15]。これは道徳性に関する適切な理解なのか。悲劇的状況の考察は功利主義に有利に働くどころか、疑念をいっそう深めさせるように思われる。

おわりに

本稿では「全一性に基づく反論」を取りあげ、これに対する典型的批判を検討してきた。全一性を重視すると言うと、行為者は人格的に傷ついてはならないとか、そのためには他者が犠牲になっても構わないといった身勝手な主張を連想させやすい。

すでに明らかなように、ウィリアムズの議論はその種のものではない。「全一性に基づく反論」は、深い性向をもつ行為者としての自己理解をめぐる真摯な〈問い掛け〉であり、部分的には、道徳的行為者としての自己理解をめぐる〈問い掛け〉である。私たちは特定の社会的文脈のなかに生まれ、何ほどか道徳的性向を身につける[16]。道徳的性向は人柄を構成するうえで寄与し、私たちは部分的にはその性向を通じて出来事や振る舞いを眺め、おのれの人生を意義付ける[17]。そうした道徳的行為者性に価値を認めるならば、功利主義を受けいれることはできない。功利主義は道徳

的行為者としての観点と相容れず、道徳的行為者性から私たちを疎外するのである。[18]

もちろん、自らの道徳的性向について批判的検討は要らないとか、道徳的性向からの疎外はいっさいあってはならないということではない。私たちは各人各様の来歴のなかで道徳的性向の変容を多かれ少なかれ経験している。その契機になったものは、例えば親しい他者の助言と叱責であり、苦悩や悲嘆の経験であり、他者の苦境への眼差しであり、あるいは予期せぬ生活の変化である。そうした契機にあっては、それまで自らが慣れ親しんで来たものを反省し何らかの疎外を経験することはしばしば不可避であり、それを否定するのは人間的成長を拒むことでもあろう。しかし、この意味での反省と疎外は、特定の性向と人柄を身につけた行為者としてのアイデンティティを不可能ならしめるわけではない。むしろ、そうした反省と疎外とを通じて、ひとは自らのアイデンティティを鋳直し、「現にある私 What I am」(See, Williams 1985, 200) を更新するのである。だが、こうした反省は功利主義的な〈観点〉から区別されねばならない。功利主義的な〈観点〉は一個の行為者としてのアイデンティティを全面的に排除し、「世界における因果的介入の場だけをあとに残す」ものだからである (Williams 1973a, 96)。

付記　以前、筆者は本稿で扱った主題について簡単に論じたことがある（都築貴博 2006）。本稿はそこでの考察を発展させたものであり、議論の必要上、内容に若干の重複があることをお断りしたい。また、二〇〇七年十月十三日に開催された日本倫理学会第五八回大会（於新潟大学）では本稿の草稿段階のものを発表し、ご来場の諸氏から貴重な御意見、御批判を頂くことができた。この場を借りて御礼申し上げる。

1　全一性という語の意味は Williams 1973a では明瞭でない。明らかに、それがこの論文の難解さの一因である (See, Walker 1975, 631, see also, Carr 1976, 242 f.)。

2　都築2006ではこの点について理解が十分でなかった。本発表と類似の整理としては以下を参照。Jenkins 2006, 29-40. Harcourt 1998は本節で扱う議論を the moral dispositions argument と呼ぶ。

3　character を「性格」と訳すと、個々の性格特性としての character trait を連想させやすい。だが、ウィリアムズが主題化するのは、そうした性格特性によって部分的に構成される〈人柄〉ないし〈ひととなり〉の次元である。その点を考慮し、本発表では「人柄」と訳出する。

4　成田和信氏は ground project を「生きがい」と訳している（成田 2004, 75）。

5　自らの動機群の意味もまた再解釈される。この点については、Williams 1993, 45f. 神崎2004も参照。

6　基本計画は「行為者の物語的アイデンティティ」の根幹をなす、とアッシュフォードは言う（Ashford 2000, 422）。

7　Williams 1985は批判対象としての「道徳」と広義の「倫理」を区別する。その用語法を用いると、本稿で道徳感情、道徳的性向、道徳的行為者性と言う際の「道徳」はすべて「倫理」を指す。

8　ストッカーは、愛や友情が「近代的な倫理学理論」と相容れないことを指摘する（Stocker 1776）。この論の立て方それ自体は「全一性に基づく反論」と同じである。都築2006では、ストッカーの問題提起から現在に至るまで功利主義陣営と徳倫理学陣営の間で展開された論争について若干の整理を試みている。

9　ジョージとジムの事例に関しても、ウィリアムズは、就職を断ること、指揮官の提案を断ることが正しい答えであると断定し、全一性の観念を用いてこの答えを正当化しているのではない（cf. Williams 1973a, 117）。しかし、ウィリアムズがそうした正当化に従事しているという誤解は、今日でもしばしば見受けられる（例えば、山内 1997, 54ff.）。恐らく誤解の原因は、「功利主義の批判者は対案として何らかの一般的基準を提示している」という暗黙の想定にある。諸々の立場を功利主義と非功利主義（あるいは帰結主義と非帰結主義）に分類する思考法は（ある場面では有用であるが）この想定を助長する。更に、「倫理学者は一般的基準を提示して然るべきである」という想定すら働いているのかもしれない。だが、ウィリアムズに関する限り、これらの想定は適切でない。Williams 1985で明確にされるように、彼は哲学的反省によって一般的基準を確立する企てそのものに懐疑的である（Williams 1985, 71ff.）。一般的基準の要求に対する批判は以下も参照。Williams 1985, 200f., Williams 1995g, 212.

10 例えば功利主義が正義を考慮しないと批判する論者は、正義が「唯一の価値」であるという強い命題を奉じる必要はないが、目下の議論も同様である。功利主義的思考によって排除される全一性の重要性を指摘することは、道徳問題はもっぱら全一性の観念を用いて解決すればよいという粗雑な主張と同じではない。

11 問題の焦点は功利主義的な「観点」それ自体にある以上、両事例に関する功利主義者の「答え」が具体的に何であるかは功利主義を批判するうえで重要でない。

12 誤解を招きやすい点であるが、二つの事例を通じてウィリアムズは、作為と不作為の間には道徳的にレレヴァントな違いがあるという論点を主題化しているのではない（Williams 1973a, 109, 117）。作為であれ不作為であれ、行為は人柄の発現でありうる。

13 もちろんヘアの論証が成功しているならば、「批判的」な道徳的思考は選好功利主義に帰着する。しかし、ヘアの功利主義導出がそもそも成功しているかどうかは疑わしい。この点については以下を参照。Williams 1985, 89-91, 奥野 1999, 225-232, 都築 2006, 19-22.

14 この論点は成田和信氏との会話から示唆を得た。無論、議論の責任はすべて筆者にある。

15 ウィリアムズによると、政治における帰結主義的決定は、仮に政治的見地からみて止むを得ぬことであっても、しばしば「道徳的損失 moral cost」を生じさせる。だが、功利主義は道徳的損失を理解しえない（Williams 1981e, 61-63）。

16 コンリーによると、ウィリアムズは個人的価値と道徳的要請の衝突を指摘し、後者を外的侵略者であるかのように描写している（Conly 1985, 281ff.）。この整理は著しくミスリーディングである。ウィリアムズの言う基本計画は道徳的種類のものを含みうるからである。

17 「部分的に」というのは、「道徳が人生のすべて」ではないからである。次の脚注も参照されたい。

18 このように語ることは、道徳的行為者性の過度な理想化に与することではない。本文中の叙述は、（a）道徳的行為者においては道徳的種類の計画が他の欲求や計画と衝突しないという主張を含意せず（See, Williams 1981b, 12）、（b）衝突が生じたならば道徳的種類の計画が必ず勝利するという主張も含意しない。（その勝利を「べし」の意味から導出する試みも不適切である。本文でも触れたように、熟慮の「べし」と道徳的な「べし」は異なる。それゆえ、自分が例えば特定の道徳的義務のもとにあることを承認しつ

つ、熟慮の結果、「それでも私はそれに従うべきでない」と結論することは可能である。See, Williams 1981h, 120, Williams1981i, 124f.)。更に、(c) 衝突の結果、道徳的種類の計画が打ち負かされるとき、「道徳的種類の計画の勝利が望ましかった」と私たちが躊躇なく断言できる、ということでもない。ここでもウィリアムズは問いを投げ掛ける。〈ゴーギャン〉が倫理的要請に背いて画業に成功するとすれば、私たちは彼に対する感謝をどこに位置づけるだろうか (Williams 1995f, 244f.)。

文献表

Ashford, E., 2000, "Utilitarianism, Integrity, and Partiality", *Journal of Philosophy* 97, 421-39.

Brink, D. O., 1986, "Utilitarian Morality and the Personal Point of View", *Journal of Philosophy* 83, 417-38.

Brink, D. O., 1989, *Moral Realism and the Foundations of Ethics,* Cambridge University Press.

Carr, S. 1976, "The Integrity of Utilitarianism", *Ethics,* Vol. 86, No. 3.

Conly, S., 1985, "The Objectivity of Morals and the Subjectivity of Agents", *American Philosophical Quarterly* 22.

Gewirth, A., 1988, "Ethical Universalism and Particularism", *Journal of Philosophy* 85, 283-302.

Hare, R. M., 1981, *Moral Thinking : Its Levels, Method, and Point,* Oxford University Press.

Hare, R. M., 1988, "Comments", in Seanor, D. and Fotion, N. (eds.), *Hare and Critics,* Clarendon Press.

Harcourt, E. 1998, "Integrity, Practical Deliberation and Utilitarianism", *The Philosophical Quarterly,* Vol. 48, No. 191.

Harris, J. 1974, "Williams on Negative Responsibility and Integrity", *The Philosophical Quarterly,* Vol. 24, No. 96.

Jenkins, M.P. 2006, *Bernard Williams,* McGill-Queen's University Press.

Parfit, D. 1984, *Reasons and Persons,* Clarendon Press.

Railton, P. 1984, "Alienation, Consequentialism, and the Demand of Morality", *Philosophy and Public Affairs* 13, 134-71.

Sen, A. and Williams, B., 1982, "Introduction", in Sen, A. and Williams, B. (eds.), *Utilitarianism and beyond,* Cambridge University Press.

Stocker, M., 1976, "The Schizophrenia of Modern Ethical Theories", reprinted in Crisp, R., and Slote, M.(eds.), *Virtue Ethics,* Oxford University Press, 1997.

Smart, J.J.C. 1977, "Benevolence as an Over-Riding Attitude", *Australasian Journal of Philosophy,* Vol. 55, No. 2.

Walker, A.D.M. 1975, "Book Review : *Utilitarianism For and Against*", Mind, Vol. 84, No. 336.

Williams, B. 1972, *Morality : An Introduction to Ethics,* Cambridge University Press.

Williams, B. 1973a, "A Critique of Utilitarianism", in Smart J.J.C. and Williams B., *Utilitarianism For and Against,* Cambridge University Press.

Williams, B. 1973b, *Problems of the Self : Philosophical Papers 1956-1972,* Cambridge University Press.

Williams, B. 1973c, "Ethical Consistency", in Williams 1973b.

Williams, B. 1981a, *Moral Luck : Philosophical Papers 1973-1980,* Cambridge University Press.

Williams, B. 1981b, "Persons, Character and Morality", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981c, "Moral Luck", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981d, "Utilitarianism and Moral Self-Indulgence", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981e, "Politics and Moral Character", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981f, "Conflicts of Values", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981g, "Internal and External Reasons", in Williams 1981a.

Williams, B. 1981h, "*Ought* and Moral Obligation", Williams 1981a.

Williams, B. 1981i, "Practical Necessity", in Williams 1981a.

Williams, B. 1985, *Ethics and the Limits of Philosophy,* Harvard University Press.

Williams, B. 1988, "The Structure of Hare's Theory", Seanor and Fotion (eds.), *Hare and Critics,* Clarendon Press.

Williams, B. 1993, *Shame and Necessity,* University of California Press.

Williams, B. 1995a, *Making Sense of Humanity and Other Philosophical Papers 1982-1993,* Cambridge University Press.

Williams, B. 1995b, "How Free Does the Will Need to Be?", in Williams 1995a.

Williams, B. 1995c, "Internal Reasons and the Obscurity of Blame", in Williams 1995a.

Williams, B. 1995d, "Moral Incapacity", in Williams 1995a.

Williams, B. 1995e, "The Point of View of the Universe : Sidgwick and the Ambitions of Ethics", in Williams 1995a.

Williams, B. 1995f, "Moral Luck : A Postscript", in Williams 1995a.

Williams, B. 1995g, "Replies", in J. E. J. Altham and R. Harrison, *World, Mind, and Ethics : Essays on the Ethical Philosophy of Bernard Williams,* Cambridge University Press.

奥野満里子 1999『シジウィックと現代功利主義』、勁草書房。

神崎繁 2004「それぞれの生の形―超越的視点と相対主義に抗して―」、『思想』（「思想の言葉」、岩波書店、2004年第5号、No. 961）。

田村圭一 1998「人格と人柄―道徳という特異な制度を批判する」、北海道大学哲学会『哲学』第34号、35―53。

都築貴博 2006「公平性の何が問題か？―ウィリアムズとスマートカーの批判に寄せて―」、北海道哲学会『哲学年報』第53号、17―32。

成田和信 2004「倫理学(2)現代―バーナード・ウィリアムズの逝去に寄せて―」、日本イギリス哲学会『イギリス哲学研究』第27号、74―78。

村上友一 2007「実践的必然性と道徳的責任」、北海道哲学会『哲学年報』第54号、19―33。

山内友三郎 1997「功利主義者いうのはほんまに慶女やろか―対話の精神と『反功利主義』批判の常識」、日本イギリス哲学会『イギリス哲学研究』第20号、51―63。